
月経症候群～ＹＵＥ～

R Y U 1

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月経症候群～YUE～

【Zコード】

N7028M

【作者名】

RYU1

【あらすじ】

主人公の土方 ひじかた 八雲 19歳とその彼女の本田 ほんだ 富子 18歳は自殺するために自殺サイトに書き込みをして、ある森で命を終らせるはずだった。

しかし、二人と自殺サイトの書き込みをして一緒に死ぬはずだった3人の男女は人目に付かぬようにその森の奥深んでいくと「洋館」を見つけそこに足を踏み入れてしまふ。

(前書き)

注) ホラー初挑戦です・・・がんばります!!

さすがに春休みの時期ともなると毎前でも24時間営業のネットカフェは結構な人が入っていた。

僕と僕の彼女の本田富子はこれから死ぬ・・・

誰かに殺されそうだつたり、病気ではなかつた。

「自殺」である・・・

「最後の書き込みいれるよ」そういう富子の指がEnterキーに置かれている。

「ああ」そういうと富子はEnterキーを押しその指に少しの未練があるのか押したまましばらく押しつぱなしで、押した右手の薬指を見つめていた。

画面はもう書き込み終了と出でいたが僕たちは富子の右手薬指を見つめてお互に何かを確認するかのようにアイコンタクトをしてパソコンの電源を落としてネットカフュを後にする。

僕たちが死ぬのはN県にある山間部の森の中で一緒に死ぬのは、自殺サイトで知り合った「リリス」というハンドルネームの人だつた。その森に行くまでは途中まで電車を使い終点の駅で自殺サイトで知り合い、これまた一緒に死んでくれるトルプとアキという二人がレンタカーで連れて行つてくれるそうだ。

トルプさんとアキさんは友人同士のようで、もともと自殺サイトでその2人が一緒に死ぬ人を呼びかけをしていたのに僕等とリリスさんが集まることになつたのである。

電車に揺られながら一人は手を繋ぎながらもお互いを見ることがなくボーッと上の空だった。

「終点 駅」この電車はこの駅までです」「終点を告げるアナウンスに初めて二人は目を合わせ、二人は手を繋いだままド田舎の駅を降りる。

掲示板の書き込みにあった赤いワゴン車は探すまでも無く駅のすぐのところに止まっていた、というか終点駅の前に車はその車以外止まつていなかった程の超ド田舎だった。

僕たちは車に近づき助手席の窓をコンコン・・・一呼吸置きもう一度だけコンと叩く、これが合図だった。

窓は開く事無く真ん中のスライド式のドアがガラツと開き一人の脂ぎった七三わけのおじさんが「早く乗りなさい」と手招きしている。僕たち二人は座席を倒して3列目の奥の席に座る「勇気さんは一人つて聞いてたけどカッフルだつたんだね」そういうおじさんの言葉に富子は少しムツとしていた。

「へえ～リリスさんて書いてあつたけど男だつたんですね」と僕は気の無い返事に少し嫌味を混ぜて返す。

それを聞いていた助手席の女性がクスッと笑う「たかがハンドルネームさ」とリリスさんは怒る口調でもなく淡々と話す。

「それじゃあ行くわよ」運転席の女性がギアを入れ替え車は制限速度を守りながらリリスさんの口調のように淡々と走りだす。まるで「これから何かしますよ」「怪しくないですよ」と言つてゐようなくらいの不自然さはあつたが、周りからはこれから自殺する僕達の「そんな挙動」があつたように見えなかつたのだろうか・・・

駅に着いたのが3時前でレンタカーに乗り換え3時間ほど経つたがまだ目的地には着かない、山間部を少し抜けた先に広い森があるのだというがなかなか着かない。

「自己紹介でもしましょうか?」と、この3時間ほどの沈黙を破つたのは助手席の女性だった。

「私はアキで元キヤバ嬢でイギリス人のクオーターで、死ぬ理由は秘密だけどね~」アキさんの綺麗な金髪のロングストレートは

おそらく染めたものだらうが少しだけ翠っぽい瞳は暗い車内でもたまに通過する道路脇の街灯で照らされ分かるほど綺麗だつた。

次に運転席に座つてゐる女性が「私はトルプ、元看護師よ以上」それに付け加えるかのようになつてアキさんが「コレでも昔は明るい子だつたのよ」と、これから自殺するとは思えないほどの明るい口調で言う。

トルプさんは綺麗な黒い瞳に黒い髪をアキさんと同じく、腰の辺りまでありそな髪をボニー・テールにしていた。

「昔と正反対ね私たち」トルプさんの言葉にアキさんが凍りついたように冷たい表情に変わるのがわかつた。

「私はリリスだ、元弁護士で今は・・・まあこの有様だ」3人が言い終えるとやはり次は僕たちの番だらう、アキさんとリリスさんが後ろを振り向きトルプさんもバックミラー越しに目が合つ。

「僕たちは一人で勇氣で・・・」言葉につまる僕の横で富子は俯き小さく震えた声でこう言つた「私たち死ぬのよ、偽りの名前なんて意味が無いわ」

僕は富子の背中をさすり「僕は八雲でこっちの彼女は富子です」と名前を明かすと富子は窓を開けて今朝から何も食べてないはずの胃袋から液体をぶちまけた。

トルプさんは車を止めて「大丈夫!?」と振り向く「大丈夫です」と富子は今にも死にそうな声でいつた。

「どうせ自殺するんだこのまま行こう」リリスさんは相変わらず淡淡とした口調だったが、富子の「本当に大丈夫ですか」という言葉に車はさつきより少し速く走り出す。

これも元看護師のトルプさんの優しさなのだろう。

目的地の森の入り口に着いたのはそれから小一時間ほど経つてからだつた。

辺りはもう真っ暗で街灯すらなかつたがトルプさん達が用意していだ懐中電灯を一人ずつ手渡され森の奥へ入つていく。

死体は出来れば発見して欲しくないという五人の総意で森の奥へ2
～3時間遊歩道から離れた場所へ行くことになつていた。

遊歩道を離れても道は険しくなつたが3月下旬の寒さは少し厳しく僕達の吐息は白くしていく「ねえ、なんで自殺サイトに書き込むのにハンドルネームが勇気なの？」トルプさんは優しく気遣うよう

に僕たちに話しかける。

「どうせ死ぬのよ私たち・・・最後に好きな名前付けたつていいじゃない」僕と富子は幼馴染で小さいころからよく遊んだし中学校の頃には付き合っていた。

そして、いつか結婚しようとか話していたがそんな話は聞いた覚えがなかつた。

またリスさんが絡んでくる「俺たちに勇気なんて必要ないさ、ここに集まつたのは自殺する臆病者達だけのはずだろ」そう僕達二人は幼馴染で好き同士だつたが両親もとは限らない。

キッカケは僕達二人が夜遊びばかりしていたせいでもあるが、うちの父親が富子の父親の上司という事も重なつていた。

富子の父親はたびたび富子に暴力を振るい、それは日増しにひどくなつて行き富子の服の下には無数のアザや火傷・・・無数の手首の切り傷が今も残つている。

僕たちはそんなんづらい現実から2人で逃げる臆病者だつた。

「あつ、雪だ」アキさんの声にみんなハツとなる「俺は凍死なんて嫌だなあ・・・」僕は「じゃあ真夏にでも死ねよ」という言葉を飲み込み着ていた革のジャンパーを富子の頭からかぶせる。

「ハ雲くん、私コートあるし・・・」僕は富子の唇に人差し指をあてて口を瞑らせる。

「熱いねえ、でもこの雪じや凍死になりそうね」アキさんは重たそ
うなりユックを下に降ろしてしゃがみ込む。

「ここまで来て、もう戻れる保障もないしこのまま始める?」とトルプさんも重たそうなリュックを降ろして中から小さなポーチを取り出す。

ポーチの中からは錠剤が出番はまだかとザラザラとこつ音を立てている。

そんな中リリスさんが持っていたカバンを落として声を上げる「あつ、あそこに建物があるぞ！！」皆はリリスさんの指差すほうを見ると木々の奥から建物らしき影が見える。

「怪しいわね・・・こんなところに建物なんて、明りも見えないし廃屋かしら」そういうとトルプさんはどんどん建物に近づいていく。僕たちもトルプさんの後を追い建物のほうへ歩を進める、建物の周りには植物が根を張り物々しさはあつたが結構立派なつくりの洋館だった。

先にいつたトルプさんは洋館の扉を開けて僕たちが来るのを待っていた「鍵も掛かってないし人の気配も無いわ」そう言い全員で中へと入つていく。

洋館の中は一階建てで外から見るよりかは少し狭く感じたが僕たちの家と比べれば凄く広かった。

リリスさんはそそくさとどこかへ行き、トルプさんとアキさんで館の2階を散策して残された僕と富子は一階を散策してまた下の広間へ集まつた。

トルプさんが「中央の大きな階段を上がって一階には左に二部屋、右には三部屋あるけど下はどうだつた？」と報告して、僕が「食堂にキッチンにトイレ・バスルームがあつたけど水道もガス・電気は通つてた気配もありませんでした」と報告すると「この建物はどうやら明治初期から中期のものだね」「リリスさんが一冊の古びた本を持つてあらわれた。

「この本は日記らしくて最初のページには慶應3年3月7日と書かれている、翌年の慶應4年に明治元年となつたから大体それぐらいだろう」僕等とトルプさんが唖然としている中アキさんが「スゴイ、頭いいんですね」と、はしゃぎ、「コレでも元弁護士だったからね」二人はキャツキヤツとしていた。

だが僕や富子とトルプさんが唖然としていたのは別の理由だった、

アキさんには見えなかつたのだろうがリリスさんの後ろを黒い何かが横切つたからである。

その黒い何かは束ねられていない乱れた長い髪でその奥に青白い肌。

・・三人は目を合わせて生睡を飲む。

小声でトルプさんが「見えた？」と聞くと僕と富子は「クリとうなずく。

トルプさんは少し震えながら「さあ死にましよう」と先ほどのポーチのチャックを開けて錠剤入りのカメラのフィルムケースを五つ取り出して皆に手早く渡す。

「ええ」でも死ぬ前にあの格好に着替えないと」とアキさんが重たそうなリュックをぶらぶらさせながら口を尖らせる「わかつたわ、じゃあ上の階で着替えて着ましよう」さらにリリスさんが「あの～最後の晚餐にと思って食事を持ってきているんですけど」と右手のかばんの中身を見せる。

かばんの中には缶詰やらスナック菓子と飲み物が大量に入つてた「オーケー、それもしましよう」とトルプさんは眉を寄せる。

「じゃあ俺たちは食堂に行つて待つてようか」そういうとリリスさんは楽しげにかばんをぶらつかせながら歩いていった。

僕は「食堂でまつてま～す」と一階へ少し大きめの声で叫んで富子の手をとり食堂へとゆっくり田に歩き出し、「大丈夫、もうすぐ楽になつて嫌なこと全部忘れよう」富子はさつきからしきりにおさえていた。

少ししてからトルプさんが降りてきた、その姿は真っ白な純白のウエディングドレスだつた。

「ほほう綺麗だね～、でも死に装束には派手かな」とリリスさんがからかうのをよそに円卓の僕達よりのほうの椅子に腰掛ける。

「しかし、数奇な運命だね・・・最後の晚餐で椅子がちょうど13ある」だれもコレに対し口を挟まないでいるとリリスさんはさらにお話しながら大きな円卓にかばんの中の食料を一つ一つ丁寧に取り出し「これでもちゃんと家庭もある子供も一人いたんだけどね～」

と呟いた。

「子供一人は生きてたらちよつて君たちくらいかな～」僕と富子を見て言ひ。

これには流石に答えないと思ひ過ぎて家出をすると言つて、こんなお菓子やジューースやらを持って飛び出してね・・・」リリスさんは長く息を吐き、「3日後に河原で水死体となつて発見されたんだよ」その言葉と共にリリスさんの目からは大粒の涙が溢れ出す。

「妻は俺のせいだとも言わずに着いて来てくれたが去年の暮れに遺書も残さず自殺してしまったよ・・・学生結婚で苦労ばかりかけてね、せめて妻だけは幸せにしてやりたかった」

トルプさんは僕等に目配せをして、一緒に席を立ち上がり食堂のドアのほうに歩き出し、小さく「ありがと」と言つてリリスさんを振り向かず出て行く。

「ふう～参つたわね～、私はアキが遅いから少し様子見てくるわ・・・それとお腹・・・大事にな」トルプさんはそう言つて階段を上がつていいく。

「トルプさん言い人ね・・・」そう言い富子は僕に抱きつき、ギュツと目蓋を閉じ声も無くひたすら涙だけがこぼれていた。そんな時である、一階からトルプさんの悲鳴が聞こえる。

僕と富子は階段をあがりさつきトルプさんが曲がった左のほうへ行き一つ目の扉を開ける「ちがう」2つ目の扉を開ける。

そこには黒いドレスに身を包み、ベッドにもたれかかり足元から大量の血が流れ肌は青白くなつているアキさんがいた。

この二人の格好を見れば同性愛者であるのはすぐにわかつたし、なんとなくその経緯も見えてきた。

アキさんは口をパクパクさせて小声で話し出す「ケイちゃん・・・子供がほし・・・かつ・・・た」そういうと体から力が抜けてうなだれ、それ以上なにも喋らなかつた「ねえアキしつかりしてよ、先に行くなんてひどいよ・・・ア・キ・・・」

富子はアキさんに近づきドレスの下のほうをマジマジと見る。

それに何か気づいたのかトルプさんも涙を拭いアキさんの着ていたドレスのスカートをめぐると、そこにはパンツ全体が血に染まっていたがそれ以上うえの体には一切の血がついていなかつた。

「トルプさんこれっておかしくないですか？」富子が言つとトルプさんはアキさんのパンツをずらして中を覗く「失血死なのは確かだけど傷も無いしあの子の生理はこないだ終つたばかりだし、私の薬でだつてこんな効果なんてないわ」

3人の頭にあの幽靈の顔が思い浮かぶ、トルプさんは少し顔を引きつらせながら「こう」「う」ときに、次に死ぬのは一人になつてる人よね・・・」「ハハハ・・・」3人は急いで階段を駆け下りてリリスさんの元へいく。

扉を開けたその先には涙が収まつたリリスさんがきょとんとしていた。

「リリスさん何ともないですか」そう言い僕と富子が駆け寄る「・・・」黙つているリリスさんに富子が手をかけ揺さぶり「今、二階でアキさんが・・・」

リリスさんの目線は明らかに僕達から外れた何かを見ているのに気がつき、その目線を追うとそこにはトルプさんと・・・肌が青白く目が真っ黒く光り、全体が透き通つた女性がこちらを見つめながらおぞましい声で「子供はどこお」と囁く。

トルプさんはもう後ろにいる存在に気づきながらも振り向かないで、いや振り向けないでいた。

「私の子供を返してえ」そういひながらトルプさんをすり抜け女性の靈がこちらに向かつてくると思つたら円卓の前でフツと姿を消した。

「今の見えましたか・・・リリスさん」僕の質問にリリスさんはただ首を縦に振つた「でも消えちゃつたね・・・」またしてもリリスさんは首を縦に振る。

「ここで自殺するの止めませんか?」この問いを投げかけようとした。

ルプさんを見ると、トルプさんは自分の股の間に右手を手を当てる。すると純白のドレスが真っ赤に染まっていく・・・「アキ・・・この世界では結ばれなくともあつちで・・は・・よね」そのまま倒れていく床にはすでに血が大量に流れていて、倒れた瞬間ベシャッという音と共に血が僕達3人にかかる。

「嫌だあ、俺はやつぱりまだ死にたくないんだあ」 そう言いリス
さんが館の入り口めがけて走り出す。

僕達も後を追い駆けるが扉は固く閉ざされていた、たかが木の扉に3人がかりで押しても蹴つてもビクともしなかった。

「そうだ、リリスさんあの本」宮子がリリスさんの持っていたあの本を取りに食堂へ戻る。

「そうか田記・・・」リリスさんと僕も食堂へ走り、一足さきに田記のページをめくっている富子の元へ集まる。

「ページの中間あたりから慶應から明治に変わつてゐる」画題せり
いぱりぱりといページをめくる、最後のほうで白紙のページがでて少
し戻ると田畠にまじつ書かれていた。

「明治七年三月二七日 雪 私は今晚出産する、帝王切開と言つね
腹を裂いて赤子を取り出すらしい。・・・少し怖い」

「お前が、おまかせの事だよ。」

「3月27日」で今日じやないか「リリスさんの顔が青ざめていく私の子供もね・・・帝王切開したんですよ・・・それでどんなものかと帝王切開について調べたら、昔は衛生面に問題がある事が多くて子供も母親も助からない事が多かつたそうだよ・・・」「リリスさん・・う・後ろ・・」今度は乱れた髪がふわふわと舞い引き裂かれたお腹からは空洞の中身が見えた。

「私はまだ死にたくないんだあ」そう叫ぶリリスさんの上に吊るされていたシャンデリアが落ちてきて、シャンデリアの中心の尖った部分が頭を貫いた。

「いやああああ」百合子はまた位置口に向かつて走り出すと靈も百合子を追いかけ「私の赤ちゃんはどいお、私の赤ちゃんはあどいおおお

お」靈の顔は見る見るうちに憎悪を増していく。

「富子つ！？」体の震えを抑えるために両腕を反対の肩を掴むようにしてゆっくりと走り出す。

もっと速く動け俺の足、なんていつも「うなんだ・・・入り口に着いたが富子が居ない。

「富子おどこだあ」「一階のほうから」「いやあ来ないでえ」という声が聞こえた「富子お今行くからなあ」少しづつだが足に力が入っていく。

二階に上ると左の廊下の奥には透き通った靈の向こうに「富子がいた」「こんのお富子に近づくなあ」無我夢中で靈に飛び掛るも体は霧につつ込んだかのようにすり抜け富子にぶつかる。

勢いあまって壁にまでつっ込むと、壁はベニヤ板のようにならぬまま突き破りその先にあった空洞にでた。

「てつてえ、大丈夫か富子・・・」その空洞で囁いたものは壁一面に張られた札・札・札だらけの部屋だった。

靈はこの部屋には入つて来れずはずっとやせつを開いた穴からちらを見つめている。

富子は何かを見て指差した「ハ雲君あれ・・・」その先には仏壇と小さな骨壇がひつそりと置かれていた「子供つてまさか・・・」「きつと、そうよ」

富子は骨壇を手に取り穴のほうへ、靈の元へ近づき「貴女の大事な赤ちゃんよ」といし差し出すとさつきまで恐ろしかった靈の顔は優しい顔になり骨壇から小さな光があふれ出した。

その光はパアと一瞬大きく煌めき消えていった「赤ちゃんかあ」富子はそういうと尻餅をついてる僕の側に来てギュッと腕を抱きしめてきた。

「まだ死にたい?」そう聞くと富子は首を横に振った「じゃあ赤ちゃんでも作ろうか?」またも富子は首を横に振った。

「こんな場所じゃあな」そう言立ち上がり「帰ろつか」と言おつとした瞬間に富子は僕の腕を放して「もう出来てるよ赤ちゃん」両

手でお腹を押さえて「ヒヒ」と笑つ。

「富子・・・お前・・・」富子は子供の頃のよつに無邪気に笑い、「名前は勇氣ね！ア・ナ・タ」

(後書き)

この作品のテーマは「母性戀」です。
ホラーらしさからぬ作品になつてると謂こますがラブホラーといつことで。。。

少しは怖がつていただけましたでしうつか?無理かな。。。
前半中盤にキャラクターの話に煙草をもつて行き過ぎた感じはあります。。。 (じやあ直せよ)
とつあえずこれが私風ホラーです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7028m/>

月経症候群～YUE～

2011年1月3日23時07分発行